

特攻

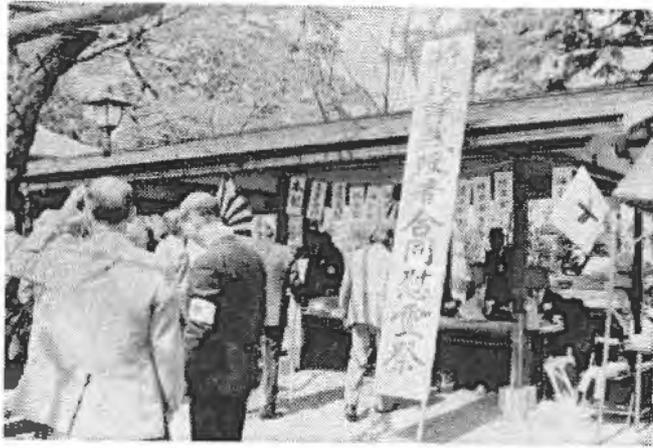
第2号

〒102
 東京都千代田区五番町12
 勸修社内
 特攻隊慰霊顕彰会
 特攻平和観音奉賛会
 電話 03(263)0851
 編集人 最上 貞雄
 発行人 最上 貞雄

特攻隊合同慰霊祭

3月25日(日)13時より靖国神社に於て、第六回合同慰霊祭が取行われた。天候が大変心配されたが、皆さんの精進のお蔭か当日は晴れ上り三二〇名を越す方々の参拝をいたした。

祝詞に続いて、竹田会長の莊重な祭文の奏



3月25日合同慰霊祭受付風景 於靖国神社



合同慰霊祭直会席上 竹田会長挨拶

上があり、一同往時を偲び肅然として禁を正した。小川徳松氏の特攻隊頭彰の詩三篇が吟詠され、ラッパ保存会会長鈴木尚枝氏以下四名の「國の鎮め」が吹奏され、終つて二梯団に別れてしずしずと昇殿、玉串を奉奠参拝を終つた。

九段グラウンドパレスに移動、特攻隊に関する往時の実写を集録した映画を参観、今は亡き富原中將、富永中將を始め知り合いの先

輩、同期生、後輩の最後のお姿が次々に写し出され、一同感激に咽んだ。

竹田会長、佐藤、寺崎、秋山、高橋副会長を囲んでご遺族の皆様の記念撮影があり、隣りの懇親会場に移り、特操1期の和田実氏の司会で、九田理事長の閉会の辞に始まり、竹田会長の挨拶、遺族を代表して伊舎堂用八氏のお出でいただき、あの悲惨な沖繩戦を思い浮かべ切々たる挨拶をいただき、一同深い感銘に打たれた。

世田谷観音寺住職太田賢照氏の献杯の儀が終り、会食懇談に移った。この間ラッパ保存会の皆様の懐かしい勇壮なラッパ吹奏があり、又61期藤森氏の兄さんがエレクトロンの軍歌やナツメロをバックミュージックとして演奏して下さり、会のムードを一段と引立ててくれた。懇談は果てるともなく続いたが、

接拶があった、伊舎堂氏は55期伊舎堂用久氏に「同期の接」を全員で斉唱、いやが上にも全員一体の気運が盛上った。

定期一六三〇、寺崎副会長の閉会の挨拶で又来年の再会を約し会を閉じた。

知覧特攻隊追悼の詞

鹿児島県特操会々長
 医学博士
 前田末男

本日は本観音堂が落成して、三十周年の記念すべき日であります。この期に始めて韓国出身特攻隊員のご遺族を、特操会並びに知覧町当局のご好意で招待致しました。

ここに改めて特攻隊とは何んであったか、どうして特攻をしなければならなかったか、又世界にどんな影響を与えたかを述べてみたいと思います。

陸軍だけで千四百余名が特攻隊として散華されましたが、その緒戦に於ては至る処で大勝、国民は戦勝気分浸り、軍部も自惚れておりました。然し欧米の戦線が終末に近づき、昭和十七年秋から連合軍の航空を核心が、昔日の面影はなくなりま

世田谷観音寺住職太田賢照氏の献杯の儀が終り、会食懇談に移った。この間ラッパ保存会の皆様の懐かしい勇壮なラッパ吹奏があり、又61期藤森氏の兄さんがエレクトロンの軍歌やナツメロをバックミュージックとして演奏して下さり、会のムードを一段と引立ててくれた。懇談は果てるともなく続いたが、

接拶があった、伊舎堂氏は55期伊舎堂用久氏に「同期の接」を全員で斉唱、いやが上にも全員一体の気運が盛上った。

定期一六三〇、寺崎副会長の閉会の挨拶で又来年の再会を約し会を閉じた。

高度の科学技術を駆使する航空機の操縦には高い素養を必要とするので、大学専門学校卒業生、在学者から大量の操縦要員を採用しました。勿論航空士官学校でも大変革が行なわれ、又少年飛行兵でも速成教育がなされました。このようにして年間二万名の操縦者を養成し、航空大拡充を図ったのであります。

が、米軍はそれを待ちませんでした。わが空中戦士達はその技量差、物量差の克服を、体当りに求めました。航空大拡充の一年の遅れが、後に大量の特攻戦死者を生む遠因となつたのでした。

数量に於て格段の差、技術に於ても相当の隔りを示す敵に対処するには如何にすべきか。そこで尽忠の大義に徹する非常戦法の唯一、眼前の国家、民族の危急を救い得る唯一の道であると感じられたのであります。即

三十八年目の「特攻」 出撃

特攻機を病室の窓から
見送った男が遂に飛び立った

内藤 初穂

(ノンフィクション作家)

太平洋戦争末期の沖縄航空決戦は、体当り特攻にすべてを託した。陸軍航空部隊も海軍の指揮下に入り、大隅半島の中ほどにある鹿屋基地に将旗があった。南九州の各特攻基地から、多くの若者たちがつぎつぎに沖縄へ向かって飛び立ち、死者となった。

それから今年で三十八年、鹿屋基地はいま海上自衛隊の第一線基地となり第一航空群とよばれる兵力が配備されている。シラス台地の上の滑走路は変りなく東西に走り、当時の掩体壕もまだいくつか残されている。

基地の北側にある小高い丘の上には、特攻隊慰霊塔が建立された。頂上におかれた鳩の像は、南の沖縄方面に向かって翼をひろげている。鹿屋市は、毎春、塔の前の広場に遺族を招き、鹿屋基地から飛び立っていった約九百名の霊をなぐさめる。

約九百名の八割を占めるのは、海軍随一の精鋭であった第七二一海軍航空隊の隊員たちである。この部隊は「神雷部隊」ともよばれ、母機から投下される人間爆弾「桜花」を主兵器として、五百キロ爆弾や二百キロ爆弾を戦闘機に抱かせた特攻機も併用していた。茨城県神ノ池基地で訓練を終えた第一陣が、神雷部隊の名をもって鹿屋基地に進出する。

神ノ池の残留部隊は「竜巻部隊」と名を変え、第二陣以下を神雷部隊へ送りだす任務についた。

八月十五日の敗戦は、死者となるべくしてならなかった神雷部隊隊員を残した。偶然に生を返された彼らは、毎年、第一次桜花攻撃隊が全滅した三月二十一日をきめて靖国神社に参集する一方、鹿屋市の慰霊祭にも代表を送り、花を捧げて、亡き戦友の慰霊をつづけている。

鹿屋市は今年の慰霊祭を四月八日とした。神雷部隊生存隊員の第二の人生もやがて引退の節目を迎える。これを機会に、生と死のはざまにいた自分を、かつての現地で見なおそうという有志三十名が、全国各地から鹿屋に集まることとなった。当日参列する遺族たちには、ちょうど出版された私の『桜花―非情の特攻兵器』を贈るといふ。私は著者として、遺族に挨拶するのが礼儀とも思い、東京班の一員に加えてもらいたいと申し出た。申し出たものの、特攻隊員でなかった私ひとり

が一行から疎外されてしまうのではないかという不安もなはなかった。「どうってことはないですよ。なんなら、当時の報道班員になったつもりで来られたら」幹事役の細川八朗氏がこともなげに言う。

彼は、第一陣として鹿屋基地に進出した予備士官二十一名のなかで一人だけ生き残ったという人物で、私の取材にはとくに力をつけてくれた。

ずたずたになった顔面

慰霊祭の前日に鹿屋へ入った一行は、その晩、宿舎で浴衣着にくつろぎ、焼酎の宴を始めた。細川氏が私を紹介し、つづいて分隊長

の一人だった海軍兵学校出身の林富士夫氏に乾杯の音頭をとらせられた後、

「本日もっともうれしい人を紹介します。神ノ池で私と同じ分隊にいた味口一飛曹です」と、席の中ほどにいる一人を指名した。

大きくふくらんだ旅行カバンをさげた味口氏が、正面に進みだした。

「海軍一等飛行兵曹味口正明であります。四国から馳せつけました。私は第一陣で出撃するはずでありましたが、桜花練習機による訓練で重傷を負い、病室の窓から皆さまを乗せた母機を見送りました」

人間爆弾「桜花」は、いわば今の空対艦ミサイルの誘導装置を人間におきかえたものと思えばよい。母機からいったん投下されてしまえば、絶対に生還の可能性はない。その滑空降下速度は、着地または着水の安全値をはるかに越えている。特攻隊員は、頭部の千二百キロ爆弾とともに爆砕するしかないのだから、もちろん実機をそのまま練習機に使うわけにはいかない。爆弾のかわりにパラソトを積み、着陸用のフラップとソリとをつけたものが用意された。特攻隊員は母機に同乗して高度三千メートルまで上がり、この練習機に乗り移って突き落とされる。速度二五〇ノット

の滑空降下は約二、三分、フラップを働かすことになる。翌四月八日は、ぬけるように青い晴天であった。味口氏は、浴衣着のままライフジャケットを首から通した。左右の止め紐をももに結んで胸をはった。初老とはいえず、紅顔の面影が左の胸に記した白ペンキの「味口一飛曹」は、すでになかば剃げ落ちていた。背中には「竜巻部隊」の字がかすれていた。「初めは神雷部隊と書いてあったのですが、神ノ池に残されたので、竜巻に変えられてしまいました。三十八年ぶりでやっと鹿屋に進出できて、また神雷と書きかえてもらえることになりました」

「ここです着てみる」

味口氏は、旅行カバンのチャックをもどかしげにはずした。なから引きだされたコゲ茶色のものを見て、座がざわついた。

「私が使っていたライフジャケットです。あれからずっと、大事に残してきました。明日の慰霊祭に着ていってよいでしょうか」

拍手が起った。

顔を傷がどうにかおさまった後も、強打した左脚の予後がかんばしくなかった。味口一飛曹は第二陣以降からもはずされ、けっきょく神ノ池基地の竜巻部隊にとどまったまま、終戦を迎えた。

「ですから、今度ようやく宿願を果して、皆さんの仲間になれるわけです」

味口氏は、旅行カバンのチャックをもどかしげにはずした。なから引きだされたコゲ茶色のものを見て、座がざわついた。

「私が使っていたライフジャケットです。あれからずっと、大事に残してきました。明日の慰霊祭に着ていってよいでしょうか」

拍手が起った。

長以下の慰霊文朗読につづいて献花、年若い遺族が付添いに支えられて進みでる姿が痛やしかった。献花のあと、儀仗隊の弔銃がとどろいた。旧海軍生存者が祭壇の前に整列して、「同期の桜」を合唱した。白髪や禿頭の姿がめだつた。私も薄い髪を風に乱しながら、精一杯に歌った。丘の上にひるがえって見た国旗がさがり、慰霊祭が終る。

登っていった道

元神雷部隊隊員は、遺族の一部とともにバスをつらね、飛行場の西端、シラス台地の崖に接した浅い盆地に移った。野里とよばれる一帯である。崖は竹やぶや灌木におおわれ、ところどころが崩れて、シラスの白い地肌がぞいている。盆地には青いかすみがあった。一面の畑はレンゲの花にうもれている。

当時、このあたりには小さな村があり、小学校や百姓家が神雷部隊の宿舎にあてられていた。三十八年前の四月八日と言えば、沖繩進攻の敵艦隊にたいする組織的特攻「菊水作戦」が始まったばかりのころである。当時ここで待機していた特攻隊員たちは、毎日のように小学校の校庭で別杯をかわした後、飛行場への崖道をのぼったまま二度と還ってこなかった。

その小学校も、百姓家も、いまはない。戦後、海上自衛隊航空隊が旧海軍基地に開隊するにおよんで、野里の部落は騒音公害になやまさされ、やがて全村をあげて移転した。小学校の校庭は雑草におおわれ、まわりの畑と区別がつかない。校庭にあったという国旗掲揚台のコンクリートだけが、瓦礫のように雑草のなかにかくれていた。

「だが、景色は昔のままだ」

と、あたりを見まわしていた細川氏がつぶ

と、細川氏が思いついたように、ライフジャケ

ット姿の味口氏をよんだ。

「飛行場にあがっていった道が残っているか

も探してみよう。三十八年目の出

撃だ。内藤さんも、報道班員のつもりでいら

っしやい」

雑草に足をとられながら、二人の後を追っ

た。だから斜度が崖につきあたるあたり

で、細川氏が足をとめた。

「下士官の宿舎は、たしかにこの辺だったと

思います。みんなが狸御殿とよんでいた古い

百姓家でした」

正面の崖は、一面の竹やぶであった。竹や

ぶにそってすきまを探していた細川氏が、

「あつた、あつた」と、叫んだ。

竹やぶをかき分けると、けもの道のような

手を腰にあてがい、ライフジャケットの胸を

そらせて、細川氏のカメラに向いていた。

「内藤さん、ここに指揮所があつたんです」

細川氏がシャッター押した。

「ありがたい地形だな」と、味口氏が言った。

「前方が下に向かってひろがっている。山の

上から飛びたつようだ。どんなにぎりぎりの

離陸をしても、十分に浮力がつく」

対潜哨戒機が一機、頭上をかすめて飛びあ

がっていった。味口氏がうなずいた。その顔

は晴れ晴れとして、なんの屈託もなかった。

味口氏の『行動調書』は、細川氏から夜の

解散式に報告された。

「味口正明一飛曹は、訓練事故のため鹿屋進

出がなりませんでしたが、本日一五〇〇、三

十八年目の出撃を敢行されました。ライフジ

ャケットの竜巻部隊を神雷部隊と書きかえる

暇もなく、野里の狸御殿跡から坂道を駆けの

ぼり、出撃の記念撮影もそこそこに、沖繩へ

向けて気分いっぱい離陸をされたのであり

ます。しかし、敵艦を捕獲するにはいたら

ず、武運つたなく帰投して、三十八年目の出

撃を終えられました。以上の経過は、内藤報

道班員も確認されております」

座がどつと沸いた。

「散り急ぐことはないぞ、味口、飲み」

湯割りの焼酎が、味口氏のコップに何度も

注がれた。

戦争はいつ終るのか

ざこ寝した翌朝、軽い二日酔を残して目を

さますと、午前中に一本しか飛ばない四国行

の便を早立ちでつかまえるはずだった味口氏

が、隣でぐっすりと眠っていた。大声で呼び

おこした。鹿児島湾の北端にある空港まで、

バス、フェリー、バスと乗りついでゆくのに

三時間は優にかかる。あわてて飛びおきた味

口氏は、別れの挨拶もそこそこに、ライフジ

ャケットでふくらんだ旅行カバンをつかん

で、バス停に走っていった。フェリーで鹿児

島に渡った後をタクシーにすれば、まだ十分

にまにあうという。戦友たちは勝手な野次を

浴びせながら、玄関先で見送った。

東京班は、夕方の便である。フェリーで鹿

児島に渡り、遅い昼食をとった。味口氏の意

外な若々しさが話題になり、細川氏は「あい

つは三十八年間、成長が止まっていたにちが

いない」と、結論を下した。

空港に着いてからが、大笑いであった。噂

した本人が泣き笑いの顔でロビーをうろつい

ていた。タクシーを飛ばして十分にまにあっ

たと思つたところ、うかつにも出発時刻のほ

うをとり違えていたという。じだんだを踏む

味口氏の眼の前で、一日一便の四国行が滑走

路をけっていった。今晩は空港のホテルで泊

るしかない。ライフジャケットでふくらんだ

旅行カバンが重そうであった。

くやしそうに見送る味口氏を後にして、私

たちの飛行機は日暮れの空に飛びあがってい

った。快い疲れに身を浸しながら、私は、鹿

屋の飛行場に立つ味口氏の姿を目の奥で反芻

していた。スチュワードがおしほりをもっ

てくる。隣の林氏がつぶやくように言った。

「私は何人もの部下を指名し、見送った。み

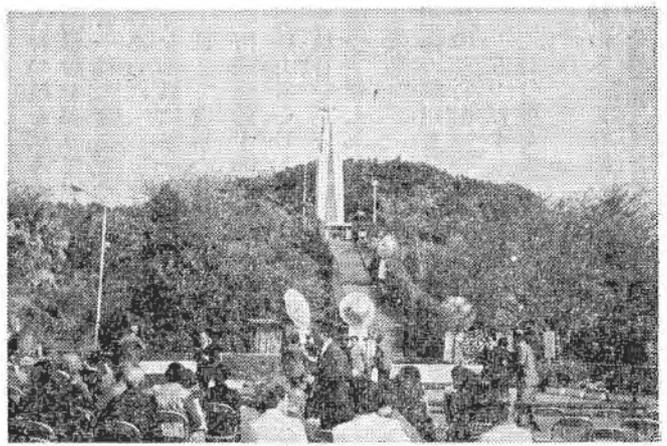
んな美しい顔で飛んでいった。その度に私

は、自分があのように美しい顔でゆけるかど

うか、まるで自信がなかった」

林氏は、顔をふいたおしほりを、をていねいに

をていねいに



鹿兒島県壱屋市 特攻隊慰霊塔

かんだ。味口氏のすぐむこうに、死者の空間がひろがっている。

「帰京してまもなく、細川氏から厚い封書がとどいた。「内藤さんにも見せてあげて下さい」と注記した味口氏の手紙が入っていた。日付は四国に帰った翌日、「四月十一日午前四時十分」とある。

……またまた残留のやり直しをしてしまいましたね。

ホテルのフロントでキーを受け取り、七階の自室へ入ったとたん、窓のカーテンをあけて明るい外の光が空いっぱいになるのと一緒に、東亜国内航空のマークをつけたジェット機が滑走路をゆるゆる移動してゆくのが見えました。これは五番ゲートの東京行の便だと、すぐ判りました。

たたみながらつづけた。「ところが、戦後になって、私は同じ夢を何度も見はじめました。五百キロ爆弾を抱いた戦闘機で出撃してゆく自分の夢です。その顔はとても美しい。気分もすっきりしている。乗機が浮く。滑走路が走る。が、いつも夢はそこで必ず目をさますのです」

私は、生き残った特攻隊員の気持がなんとなく分るような気がした。彼らはたえず死者の世界の一步手前で、それを自分のものとして凝視していた。その凄絶な記憶は、戦争が終っても容易にふりきれない。

「みなさんの戦争は、みなさんが死んで初めて終るのでしょいか」

と、私は言おうとして、言葉を飲んだ。

言葉は空しい。特攻については、批評家देशかり得ない自分を意識した。飛行場の味口氏の姿が林氏の言葉とかさなって、また浮

カミカゼの神話

ノースカロライナ大学四年

アーウィン・T・ハイアット

第二次大戦は、さまざまな新兵器を生んだが、従来の戦争の観念を破った極めて特異な戦法として、日本の「カミカゼ」攻撃があげられるだろう。パイロットが飛行機ごと敵艦に体当たりするというこの戦法が、他の国にもしばしば見られる決死的攻撃と違うのは、それが日本軍によって長期にわたって、採用されたという点である。

我々西歐人はこれまで、カミカゼ攻撃を、この時期だけに現れた狂信的な異常現象と考えてきた。しかし、特攻が生まれた背景、さらに日本の精神文化そのものを検証していくと、そういった印象が間違いか、せいぜい半面の真実しかついていないことがわかる。

大戦当時、優秀な陸軍と、世界でも最大の海軍を有していたが、日本の戦略のバックボーンをなしていたのは、この「この武器より精神」という理想だったのである。軍側も、伝統的な精神主義を利用した。

特攻を生んだ要素として武士道の伝統もあげられる。生き残ったある特攻隊員は、当時を回想して「闘わずして降伏するなど論外だった。矢尽き、刀折れるまで闘うのが武士道だ」と語っている。

実際、圧力はあったにせよ、特攻は志願制をとっており、嫌がって泣き叫ぶ隊員が無理やり操縦席に押し込められた、といった話は聞かない。それが事実上の強制でも、出撃命令を拒否したパイロットも部隊もなかったのである。

この特攻隊の「義務感」を理解するうえで、第一に考えなければならないのは、アジアを西欧の支配から解放、平等社会を建設す

るための「明白な運命」という社会通念にあってきた事実だ。第二の重要な点は、人はいづでも死ねる心構えがなくてはならないとする儒学の教えと、「至誠」に価値を置くサムライ精神に結びつけ、勇気をもって死に向かう英雄行為へと発展していったことだ。

一方、自殺についても、弱さの現れと見る我々西欧人と異なり、日本人は、一定の状況下では自殺こそ唯一の名誉ある行動と考えてきた。恥辱を受けるより死を選ぶのは当然と見なされ、敗北が相次いだ大戦末期となるに、カミカゼ攻撃は何ら特殊な戦法ではなく、地上戦でも自殺的なパンザイ突撃が一般化し、民間人さえ敵の軍門にくだることを潔しとせず、集団自決を遂げたのである。

出撃を決意する動機も結局のところ、現実に自分の家族の命が連合軍によって危うくされているという事実だ。彼らの悲しみといえ、自らの死よりも、彼らを失う家族を思っていたものだった。

米欧連合国側にも、一部ではあれ、「信ずるものために命をささげることこそ勇気ではないか」といったカミカゼ再評価が出てきたことだ。さらに西欧の歴史家たちは、カミカゼ特攻精神と、フランス軍の「エラン」(気力)に相似性を見いだし、西欧にも似たような文化的伝統があると指摘した。このため、カミカゼに対する当初の拒絶反応は後退し、日本でも、わが国でも、理解が深まっていく。

特攻は、絶望的な状況において、日本の精神文化と伝統が行きついた帰結である。しかし、「パイロットたちは、愛する者を守ろうとしたごく普通の人たちだったのである」という言葉が特攻隊員の姿を最もよく表している。

特攻隊慰霊顕彰会寄付者芳名

三菱重工(株) 瀬島龍三様の各50万円を始め多数の方々よりご寄付をいただき、感謝申し上げます。ご芳名は更に募金が進んだ時点で発表させていただきます。

特別攻撃隊讃歌「倭」

(少候24期) 山田晃 作

御櫓われ 顧みはせじ武夫の 明日を待まぬ玉の緒が暫し露營の草枕 月に結ばば光り映えて鉄の兜はつゆしとど 頃しも昭和二十年 俄かに戦雲急を告げ 昨日北洋の霧深き 孤島に玉砕を報ずれば 今日南海の密林に 思い設けぬ敵のかけ 撃ちてしまん益良夫の心は矢竹に逸れども 怒濤の如く打ち寄する彼の物量をいかにせん 奇略の道も何かあらむ由々しき悲報相つぎて 我が一億の国民は 深憂ここに窮まるか 実に天祐なきを恨みけり 常ならば 春の弥生のさくら哉 霞と紛う山に野に 募り募りて吹く風は 希望にふくるる若き木の夢を吹きちぎる 勝ちて嬌りし敵艦隊は無比の戦力を誇りつつ 南西の海に寄せにけりさわれ特別攻撃隊は 時こそ来たれいざ征かん日頃鍛いに鍛えたる 入神の技を試みん この身愛機と諸共に 敵艦を葬りて 祖国の危急を救はんと 皆一様に奮え立つ 神あらは 神みそなはせ純忠の 身を神風に來せ果てむ目指すは那覇よ八重山 上征えて還らぬ悲壮さに地祇は怒りて火の国 の阿蘇鳴動すその憤煙 夕陽に燃えて茜する 桜島山崩らじと 星をも熔かさん夜の空へ 今轟音を見守れば はや旋回の翼を振り 嗚呼空煙に入りにつけり。 幾島かげ 進れや可愛し友の雄が 祖国の勝利を信じつつ天駆り征きしそのかみ の淨き心を知るや白雲 在り経つ語りつくせぬ神技の 君の勲を誰が伝えむ 現身ここに二十年 神のみたまを祀らんと集うて来れば在りし日 のその「倭」はさながらに我にもの云う如くに

て唯涙する計りなり 唯涙する計りなり。

特攻平和観音奉賛会と 特攻隊慰霊顕彰会について

標題の両会について大変まぎらわしく、誤解をされる向きも耳にいたしますので、簡単に説明させていただきます。

特攻平和観音奉賛会 これは世田谷山観音寺内の特攻平和観音堂に奉安されており、まず特攻平和観音の奉賛会です。

毎年九月の秋分の日に年次法要、毎月十八日に月例法要が各々午後二時より取行われ、お祀り出来ませう、奉仕協力をさせていただきます。

ただ、これが主たる目的です。 年会費 一口 一〇〇〇円 終身会費 一口 一〇、〇〇〇円 郵便振替 口座名 特攻平和観音奉賛会 口座番号 東京一四一七六六

特攻隊慰霊顕彰会

これは特攻隊烈士の英霊の慰霊と、その偉績を顕彰し、壮烈極まる崇高なその殉国精神を末永く後世に伝えるため、主として次のような事業を行うことを目的としております。

- 一、特攻隊顕彰施設を靖国神社に奉納。 二、特攻隊に関する各種資料(写真、遺書、遺品其の他)の収集整備。 三、靖国神社に於て特攻隊慰霊祭を行う。 他、各地の慰霊顕彰行事への協力。

以上の事業の為、募金活動を行っている。 個人会員 一口 五、〇〇〇円以上 法人会員 一口 五〇、〇〇〇円以上 郵便振替 口座名 特攻隊慰霊顕彰会 口座番号 東京四一五九五八〇

従って両会の会長始め役員、世話人等は原則的には二身一体となつて、お世話させていただきます。

何卒意のあるところをお汲取りいただき、両会にご協力賜りますようお願い申し上げます。

事務局長 最上貞雄

貸借対照表

Table with 4 columns: 科目, 金額, 科目, 金額. Title: 特攻隊慰霊顕彰会 昭和59年 3月31日. Rows include 資産の部 (現金, 普通預金, 定期預金, 郵便振替) and 負債の部 (未払金, 計, 正味財産の部).

収支計算書

特攻隊慰霊顕彰会 自昭和58年 4月 1日 至昭和59年 3月31日

Table with 3 columns: 科目, 金額, 金額. Title: 特攻隊慰霊顕彰会. Rows include 収入の部 (募集基金収入, 定例会費収入, 月例会費収入, 受取利息, 雑収入) and 支出の部 (募集基金費用, 定例会費用, 月例会費用, 振替手数料, 慶弔費).

以上のとおり報告します。 昭和59年 8月30日 特攻隊慰霊顕彰会

註 定例会とは靖国神社での慰霊祭 月例会とは平素の理事会のことを言います。